

第 4 章

国民の 生活と経済



ナマンガン市の市場(2003年撮影)

ソ連時代の計画経済が失敗した結果、社会主義イデオロギーを掲げつつづけることが難しくなったことは、ウズベキスタンの人々の自己認識（アイデンティティ）と、物事に対する考え方（メンタリティ）の変化に重大な影響を及ぼした。さらに、独立後に市場経済と資本主義が導入されたことで、人々の日常生活にも多大な変化が生じた。そこで、本章では、人々の日常生活と経済基盤がどのような影響を受けたのかを考えてみたい。

I 市場経済への転換と国民生活への影響

ウズベキスタン国民の大半は、ソ連邦崩壊によって引き起こされた経済的混乱を個人的に体験している。ソ連時代から引き継がれた公共サービスは、人々の基本的ニーズに応えてはいるものの、国民はかつて経験したことのない新しい難題にも直面している。

1 変わりゆく公共サービスと低下する生活レベル

市場経済への移行は国家と国民の間に新たな関係を強要した。国民が政府に頼ることができ、政府に雇用や教育などの面倒をみてもらっていたソ連時代とは大きく変わった。そのような変化は、公共サービスにも影響を及ぼす。国家機関は今なお最低限の生活水準を守るために必要な措置を講じていると主張している。しかしその規模は、ソ連時代に慣れ親しんだものに比べると、大規模でも包括的でもない。その結果、人々の要求は増大しているにもかかわらず、生活水準は確実に低下しつつある。

水はウズベキスタンのほとんどすべての地域に供給されているが、地域によってその質にはばらつきが見られる。例えば、タシケントやその周辺では水質に問題はなく、料理にもそのまま使われる。しかし、乾燥したブハラやカラカルパクスタンなど、砂漠化や、水量の急減により死滅まで危惧されているアラル海の影響を受けている地域に近づくほど、水に含まれる塩分が多くなる。そのためブハラでは、サマルカンドから塩分の少ない水をパイプラインで引き、それを地元の水に混ぜて市民に提供している。ソ連邦崩壊後は各世

帯にメーターが設置され、水の使用量に応じて料金が支払われるようになった。これは社会主義時代の制度とは大きな違いである。当時は一定の基本料金を払っておけば、水を無制限に使うことができた。しかし、そもそも乾燥して水が限られている中央アジアの場合、水の節約は不可避であり、メーター導入は人々からある程度の理解を得た。

電気・ガスも、ウズベキスタンのほぼ全土にインフラが行きわたっている。しかし、都市部での供給はほぼ安定しているものの、農村部では、インフラの老朽化やメンテナンス不足のため、あるいはそもそも電気・ガスが不足しているために供給が止められることが多い。ソ連時代においても供給停止はたまにはあったが、最近では、電気・ガスの一時的な使用制限が頻繁に行われている。

電話に関しても、通話時間に応じた料金システムが導入された。社会主義のもとでは、水と同様に一定の電話回線使用料を払っておけば、無制限に使える制度が存在していたため、長電話する人も多く、電話も通じにくくなっていた。皮肉なことに実際に話した時間によって通話料が請求されるようになると長電話する人が減り、電話の接続状態も改善されてきている。このように、水にしろ電話にしろ、人々の姿勢が変わったことがもつとも大きな変化と言える。多く使った人はその分多く払わなければならないという強いメッセ

ージが社会に向かつて発信されたのだ。

住居について言えば、ソ連時代は国が人々にアパートなどを提供することが多かった。そのようなアパートの場合、たいていは日常生活に最低限必要な設備が利用可能だった。都市部では、バスタブ、シャワー、水洗トイレ、給湯システム、料理用ガスレンジや料理用流し台などが普及している。一九九〇年代前半には、国からアパートを安く購入できたため、都市部のアパートに住む人の中には、これを私有化した例も多い。このことは、住居費という本来なら大きな金銭的負担を抑え、人々の生活を助けている。また、扇風機、エアコン、冷蔵庫、洗濯機、掃除機、カラーテレビ、ビデオカセットプレーヤーなどの家電製品や、固定電話、自家用車をもつ家庭も都市部では多い。

ただし、全人口の六割以上が住む農村部の生活スタイルは都市部のそれとは大きく異なる。農村部ではアパートよりも一戸建てが多く、それらは焼きレンガや土レンガで作られている。このような地域では、電気、ガス、水のインフラが存在したとしても、都市部と比べて供給は安定していないのが実情である。

現在のところ、ソ連時代からのアパートやインフラの「遺産」が残っていることもあり、人々の生活は一定の水準を維持している。しかし最近、都市部、農村部とも将来に対する

不安から、コストを必要最低限に抑えたいと考える人々が増えている。それは、家庭外での支出削減および個々の家庭での自給自足強化という共通のパターンで現れている。人々は新しい商品の購入をできるだけ避け、外食や社交を控えるようになってきている。

2 国民から見た政府の経済改革

ウズベキスタンは、国家主導の段階的な経済転換を実行してきた。国家が経済に積極的に介入したのは、国民への経済改革のショックをやわらげるとともに、安定した経済発展を可能にするためだった。政府が独立当初から掲げたスローガンは、「新しい家が建てられないうちは古い家を壊すな」というものだった。その政策はある程度成果を上げ、ウズベキスタンでは、他の旧ソ連諸国に見られた生産率の急激な低下に歯止めをかけることができた。

しかし、政府の指導による経済改革は国民からそれほど高い評価を受けていない。二一五年に行われたアジアバロメーター調査では、政府の経済政策への評価は「非常に良い」(四・一%)、「まあ良い」(二一%)を合わせても全体の四分の一にすぎず、五四・三%が「あ

「あまり良くない」、一八・一%が「非常に良くない」と評価している。さらに、九割以上の人が政府の失業対策を「あまり良くない」(三七・四%)、あるいは「非常に良くない」(五五%)と考えている。また、同調査の結果は、ウズベキスタン国民がどのような不安を抱えているかを示している。例えば、主な不安材料は何かという質問に対し、失業(二 三年には七・五%、二 五年には七四%)、貧困(二 三年には六九%、二 五年には七 %)とともに、健康・医療(六三%、二 五年)を挙げる人が増加している。

このデータは、経済政策が結果として成長に結びつかないことや失業が減らないことに対する国民の不満を反映している。このことは、ウズベキスタン政府がこれまでとってきた一連の経済関連政策が、国民から見るとそれほど結果を生み出さず、国民の支持を得ていないことを示している。

Ⅱ 世帯構成と収入

独立後の中央アジア諸国が直面した経済問題の影響で、失業と低賃金は人々の生活水準

の低下につながった。一般に、中央アジアでは家族の構成員が多い傾向が見られるが、最近はその数が減少する一方、二丁三世帯で住むケースが増えている。中央アジアでは平均収入は国によって異なる。景気が良いカザフスタンでは月収が比較的高く（平均で三〇五 ドル以下、ドル）、その他の国々では高いところでも平均一〇ドルを超えないところが多い。そのため、家族の構成員が結束し、助け合って家計を成り立たせている。

1 家族構成

もともと、ウズベク人をはじめとする中央アジアの各民族は大家族だが、アジアバロメーター調査では、現代ウズベキスタンでは多くの家庭が二丁七人で構成されていることが明らかにになった（図4）。

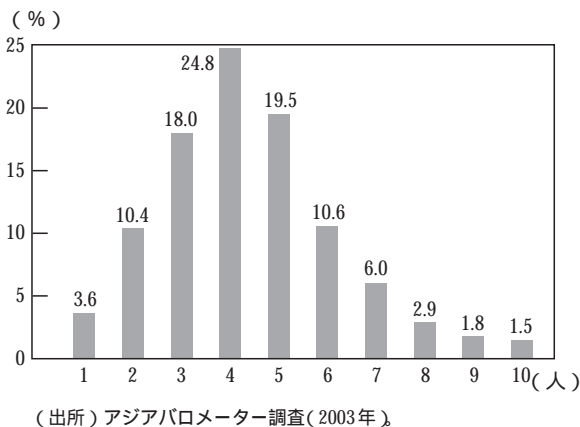
同調査によると、多くの家族（六三・一％）が二世代で、主に両親と未婚の子供たちで構成される。三世代の家族と一緒に暮らしている家庭は全体の四分の一弱である（二二・九％）。なお、両親と子供のいない夫婦が同居するケースは少ない（四・一％）。親と未婚の子供からなる二世代世帯が標準的だが、民族によってややばらつきがある。二世代家庭は、ウズベ

ク人(六四・二%)、ロシア人(五五・七%)、タタール人(七八・四%)、カザフ人(五四・二%)、タジク人(五五・六%)、カラカルパク人(七二・七%)、朝鮮人(五%)の間で比較的多い。単身者の一人暮らし(三・一%)と答えた回答者は全体ではごくわずかだが、その中で割合が大きかったのはロシア人(一一・五%)、タジク人(五・六%)、カザフ人(四・二%)である。

2 世帯収入

同調査によると、就労者一人の家庭が全体の四一・三%を占めており、二人で家族を養う家庭が三六・六%でこれに続

図4 ウズベキスタンの家族構成



いている。就労者が三人いる家庭は二三・八%、四人は四・三%である。

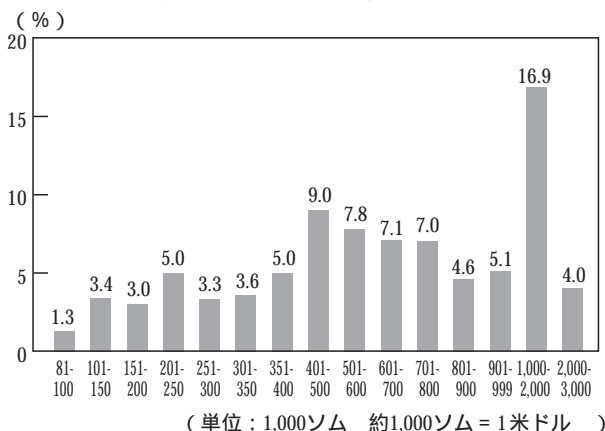
ウズベキスタンの世帯収入は、国際的水準と比較してかなり低い。八人の回答をもとに得たデータからわかるように、比較的高い二万三万ソム(二)と三万三万ソム(二)と二万二万ソム(一)と二万二万ソム(一)の年収を得ているのはそれぞれ四%と一六・九%であり、合わせて全体の二・九%にすぎない。これに続くグループが年収四万五万ソム(四)と五万ソム(五)の世帯である。三番目の比較的優位なグループは年収五万九万ソム(五)と九万ソム(二)の世帯で構成される(二)と三年データ。その他詳細な割合は図5を参照)。

比較のために国家統計を見てみよう。それによれば、二一二年上半期の一人当たりの収入(月収六カ月分の合計)は平均九万二七ソム(約九二ドル)である。この数字から計算すれば、一人当たりの年間収入は一八万四ソム(一八四ドル)前後となる。同じく国家統計によれば、同じ時期の物品とサービスへの一人当たりの支出は八万一八ソム(約八二ドル)である。

職業別では、面接対象者の二三%が医師、法律家、エンジニアなどホワイト・カラーの専門職である。これに次ぐのが主婦(一四・六%)、熟練または半熟練の労務職(一四・五%)

である。零細小売業者は回答者の三・九%にすぎないが、ウズベキスタンの国民全体ではこの職業グループの割合ははるかに高い。その高い割合が今回の調査で表れなかった理由はいくつかある。その一つとして、彼らは、アジアバロメーターの調査結果が政府機関に利用され、税金を払っていない者が払わされるのではないかと考えた可能性もある。また、今回の調査結果が税金以外の側面でも回答者に何らかの悪影響を及ぼすと思われる可能性もある。ただし、これは職業だけでなく他の質問に対する

図5 ウズベキスタン家庭の年収



(出所) アジアバロメーター調査(2003年)

る回答にも適用できる論理である。

これら以外の職業でウズベキスタン人口の大きな割合を占めているのは出稼ぎ労働者である。彼らの多くはロシアやカザフスタン、韓国に出稼ぎに行く。彼らの社会的立場は低く、収入も不安定である。そのことから、彼らの多くは出稼ぎ労働者としての身分よりも大学で学んだ専門職や出稼ぎ労働者になる前の職を名乗ることが多い。

また、国家統計によれば、国全体の失業者は二 一年六月で九万六 人(人口の

・五%以下)だが、これは現実離れた数字である。アジアバロメーターの調査結果によれば、全人口の七・九%が失業している。これ以外に、潜在的な失業者も大量に存在する。

支出に関して言えば、ウズベキスタンの物価が低いことから、比較的低い収入でも生活はできるが、そのやりくりは決して容易なものではない。例えば、最低レベルで計算しても、光熱費月一万ソム(一 ドル)、食費六万ソム(六 ドル)、交通費三万ソム(三 ドル)などであり、合計は月額一 万ソム(一 ドル)を超える(二 三年)。

このような現実とは、ゆるぎない忠誠心と引き換えに国家が仕事と収入を保障した社会主義時代とは著しく異なっている。体制転換後、国家はもはや国民の生活に対して包括的な責任を負わなくなり、人々は今や自分自身や家族だけを頼りに生活していかなければなら

ないのである。

Ⅲ 過去と現在の生活に対する評価

1 破綻した国債制度

社会主義時代の終焉により、国民と国家の関係が変わったことを象徴する出来事は、一九九〇年代前半に起きた国債制度の危機である。これをきっかけとして、多くの人はソ連時代が終わり、新たな時代が訪れたことを直感的に認識した。

ソ連時代、家にタンス預金しておく人も少なくなかったが、多くの人は自分のお金を銀行口座に預けるか、もしくは国債に投資し、「価値がなくなるならない宝くじ券」として持っていた。当時は銀行が国営で、国家と銀行に対する人々の信頼は非常に高かった。金利は低かったものの、銀行の破綻というものがないので、家に現金として保管しているうちに泥棒に盗まれるよりずっと安全だったのだ。一方、国債は預金以上に人気があった。国債の

利率も低かったが、国債番号を対象とした宝くじが定期的に行われ、当たれば賞品ももらえた。私の父も国債をもっていたが、あるとき、宝くじの当選番号が父の国債番号の下一けた以外すべて同じという僅差で当選できなかったことがあった。このときの賞品は当時大変人気があったヴォルガ（Gas 24モデル）という乗用車で、父はあまりのショックで寝込んでしまったことを覚えていいる。乗用車があとわずかの違いで当たらなかったことを悔やんでいた父に対し、祖父はこう言っただけ。

「国とギャンブルをしない方がいいよ。（一般市民が）絶対負ける制度だから」

不幸なことに、祖父のこの言葉はブラックジョークではなく正確な予言となってしまった。



1960年代のヒバリの市場（G.Sekimori撮影）

ソ連邦崩壊後、ウズベキスタン政府はソ連の国債の代わりに自前の国債を発行した。しかし、しばらくするとその国債も凍結された。インフレの影響でお金の価値は毎日のように下がる一方、国債に記載された金額はそのままだった。政府は、国債をいずれ現金と交換するが、その時期はまだ来ていないとして、国のために我慢するよう国民に呼びかけた。その結果、国債に投資した人の多くは一瞬にしてお金を失ったのだった。

2 生活の変化から精神面の変化へ

多くの国民にとって、ウズベキスタンでの生活は将来への保障があるとはいいがたい。政府や議会はさまざまな大統領令や法律を發布するものの、多くの場合、それらは一般国民の日常生活の向上にほとんど影響しておらず、大多数の人々の生活にはあまり良い結果を生み出してはいない。

ウズベキスタン人の価値観も少しずつ変化している。多くの人々は、まるでジャングルにとり残され、生き残るために戦わなければならないような心理状態に置かれている。収入、雇用、教育といった面で政府の役割が果たされず、人々の生活にとって非常に複雑で

厳しい状況が発生している。人々は国家の福祉や公共サービス、雇用面での政策の弱さを責任放棄と見なし、自分たちに対する国家の裏切りと感じている。そのような状況は人々の国家に対する抵抗をも引き起こす。もともと、ウズベキスタンの現状では、それは必ずしも暴力的な方法や革命を意味しない。保守的で家族を大事にするウズベキスタン社会では、人々が革命や反乱を起こす可能性はあまりない。

政府や国家制度に対する国民の対応の仕方は別の形で現れる。例えば、政府や政府系の商社がガソリンなど日常生活に必要な商品の価格を上げると、自分の立場やコネクションを利用してそれらの商品を横領する人が出てくる。独立直後、国家機関への抵抗の方法はいくつかあった。その一つは、公務員の低い給料への抗議として職を辞し、別の仕事に就くことである。彼らの論理は、国民のことをまったく考えない国家機関と自分のことばかりを考える政治家のために働くより、同じ安月給でも国家とつながりのない仕事に就いた方がましだということである。当時は民間企業がそれほど多くなく、公務員を辞めた人の多くは担ぎ屋になり、バザールで仕事を求めた。このような傾向は今でもある程度残っている。一方、公務員を辞めた人の間で起業する人は少ない。その理由としては、課税率の高さや国家機関のビジネスへの介入が挙げられる。国家機関は、公式には起業を促進する

というが、それは実行に移されていない。

新たな社会構造の中で収入源を見つけ、自分の地位を確立できた人は生活が安定しているが、そうでない人の経済状況は厳しい。しかも、そのような人々は社会の大半を占める。彼らは今まで築いてきた財産を処分し、あらゆる仕事をしながら生活を送っている。このような状況は社会に直接的な影響を与え、モラルも変えていく。

ソ連時代の教育や国民のモラル形成の一環として、人々の間ではいわゆる「正しいこと」と「正しくないこと」の区別が強調された。もちろん、その中にはイデオロギーに沿った内容もあったが、人々が受け入れやすいことも多かった。もっとも浸透していた「正しいこと」とは、一生懸命働くこと、仕事にお金ではなく理想を求めること、などである。そのような姿勢は、特に戦争やさまざまな困難なことを乗り越えてきた世代の人々の間で一般的であり、彼らは若者に対しても同じことを教えてきた。最近話す機会があった中年のウズベク人によると、「ソ連時代は自分のことしか考えない人にとっては良くない時期だったが、自分のすべてを国（戦争での）勝利、国民と（共産）党に捧げた人はいつも良い生活をしていた。ところが今は嘘つきが多く、当時のことを悪く言うけれど、そんなことはない」という。

また、彼と同じ年代のロシア人によると、「ソ連時代の良いこととして印象に残っているのは、私たちはどこに行き何をするべきなのかがはっきりしていたことです」。

つまり、当時は学校から大学、大学から入党・就職といったルートが出来上がっていたし、イデオロギーの影響で、人生で何が重要なのか、何を目指すべきなのかがはっきりしていた。その中で特に強調されていたのは、社会のために自分自身を捨てて働くことだった。自分の利益だけを目指した人は批判され、白い目で見られた。それが当時の正しい生き方だったが、ソ連邦崩壊とイデオロギーの転換によってすべてが逆になった。年寄りや中年の人々に言わせると、このような変化と新たな社会構造が導入されたことは、自分たちが現在まで頑張つて作り上げてきたことがあまり評価されない、もしくは否定されることを意味する。それに対する彼らの悔しさは想像に難くない。

若者はソ連時代を経験していないのでそのような上の世代の話に共感できず、世代間でモラルに関するギャップが生まれる。筆者は最近、新しい世代に属する人と話す機会があった。筆者とは五歳しか違わないのだが（彼のほうが年下である）、価値観の違いに驚いた。筆者の同級生の世代の価値観では、「理想」、「夢」、「感動」、「感情」といった概念が重要だった。しかし、ソ連邦崩壊後に育った新しい世代は、「計算」、「利益」、「冷静さ」、

「感情や理想の否定」などが特徴的で、彼らは筆者もその中の一人である五歳上の世代の価値観を小ばかりにする。彼らはまさに資本主義イデオロギーによって育てられた世代である。そういう意味で、筆者は彼との間に大きな世代間ギャップがあることを実感したのだった。筆者と同年代のペレストロイカ時代に成長した世代は、一方で社会主義教育を受けつつ、その崩壊も経験し、社会主義の理想と資本主義の現実の間の妥協点を探っている。しかし、その後の世代は理想的な社会を求める余裕もなく、資本主義の利点だけでなく、負の部分をも無批判に受け入れてしまっているように見える。

3 ソ連時代へのノスタルジー

このような状況下で、人々は現実を非常に複雑な気持ちで見つめている。一方で、ウズベキスタンの国民は独立と自由を手に入れた。特に、民族的な伝統と習慣を復活させ、それらを日常生活の中で堂々で行うことができるようになった。ソ連政府によって長年禁じられていた宗教と、それに関連する行事も自由化された。

他方、人々の生活水準は年々下がっており、さまざまな宗教・民族・伝統的な行事を行

う自由を得ても、現実にはそのような行事を行う経済的余裕はほとんどない。ソ連時代には、確かにこれらの行事は禁じられていたものの、非公式にこっそり行うことは可能だった。そのため、ソ連時代の方が良かったという声もよく聞かれる。例えば、筆者がバザールで会ったある人は、ソ連時代の生活を次のように語っている。

「私はソ連時代の方が好きでした。なぜなら、すべてのものがあり、私たちは満腹（toqin-sochin）でした。私は四五ソム（筆者注…ソ連時代の通貨はルーブルだったが、ウズベク語の会話ではルーブルのことを「ソム」と呼んでいた）しかもらっていなかったけれど、家族全員に必要なものを買うには十分でした。たったの四五ソムですよ！私の夫は五五ソムをもらっていましたが、その後六五ソムになりました。彼は数学者で博士候補号（kandidat）を取得しました。私たちの三人の子供は全員大学を卒業し、一人は歯科医になりました。二人目は工科大学を卒業したけれど、今は自分の専門分野で仕事がないため別の分野で働いています。ソ連時代に関して私はネガティブなことを知りません。実感したこともありません。」

もちろん、ソ連時代も生活に対する不満はあった。筆者の子供時代の記憶に残っているのは、肉の値段に関するおばさん二人の議論である。一人は、店で肉一キログラム当たり一ソム（ルーブル）を払ったが、骨が多くあまり良い料理にならないと言っていた。もう一人は、バザールにはもつと良い肉があるが三ソムもするので、もう少し安くしないと手が出ないと文句を言っていた。つまり、ソ連時代も、安いものは質が悪く良いものは高いという発想があった。しかも、ソ連時代は物不足が深刻だった。それでも、物価が安く衣食に事欠くことはなかったという印象をもつ人は多い。むしろ、独立後はソ連時代と比べて状況が悪化していると考える人も少なくない。タシケントにある工場で働く労働者の証言はそのような考え方の現れである。

「ソ連時代の生活は非常に良かったです。例えば、水道料金は無料で、店にはすべての食料品があり、非常に安かったです。一ティン（筆者注…ルーブル）一ティンロシア語でコペイカ、一ティンは最小の単位）でマッチが買えました。路面電車の運賃は三ティン、トロリーバスは四ティン、バスは五ティン、特急バスは一ティン、乗り合いタクシー（二人乗り）は二ティンでした（筆者注…一九七〇年代～一九八〇年代当時の一

ドルの公式レートは五九ティン、非公式レートは一ソム。」

多くの人々がソ連時代の方が良かったというもう一つの側面は、社会保障である。ソ連時代、医療、教育などのサービスは無料だったが、独立後は市場経済化に伴いそれらが有料化され、人々にとって大きな負担になっている。政府は、公式には手厚い保障を約束するが、事実上それは絵に描いた餅にすぎない。おのずと、人々は自分たちの過去と現在を比べ、過去の方が現在に勝っていると感じてしまう。

「今になって言うのは良くないかもしれ



1960年代のヒブア市の市場（G.Sekimori撮影）。

ませんけれど、あの時期をもう一度経験し、あの時期をもう一度生きてみたいのです。当時、私は二人の子供を一人で養っていましたが、まったく問題なく育てていました。幼稚園はほぼ無料で、学校と大学も同じです。当時は今のような問題はありませんでした。

私の特に良い思い出は大学時代と関連しています。私は大学卒で、SAMSI（中央アジア医学大学）を卒業しました。私たちの実務経験はキエフ（ウクライナ）で行われ、旅費と生活費すべてを国が負担してくれました。私たちは国の負担でハリコフやチェルニゴフを回り、いろいろな博物館を訪ねました。当時は学生券（学生証提示による学割制度）というものがあつて、それを使って博物館などに行きました。

確かに、ソ連という国は閉じられた国でしたが、私たちは特に気にはしていませんでした。外の世界に出たいという気持ちもなかったし、国内が非常に楽しかったのです。ソ連が解体されつつあった一九九一年にも、私は一五ループルでレニングラードまでの往復切符を買うことができました。そういう意味で、私には良い思い出しか残っていません。」

このように、人々の間にはソ連時代に対するノスタルジーが存在するが、最近では独立

の意義を疑問視する声までも出てくるようになった。独立しても生活水準が良くなるというえに、政府の国民に対する態度もソ連時代とそれほど変わらない中で、一体何のための独立だったのか、という疑問を人々は抱いている。

「私たちは共産主義時代に生きながら、そのことに気がついていなかったのです。フルシチョフの『次の世代は共産主義を経験する』という言葉がそのまま実現したことさえ、私たちにはわかりませんでした。当時は生活も楽でしたし、出生率も高かったです。今の給料は年々増えていきますけれど、インフレのことを考えると事実上給料は減っています。多くの物の値段は世界的な水準なのに、給料の上昇率は低いです。労働者や一生懸命働いていた人にとつてはソ連時代の方が住みやすかったし、ソ連時代に対してノスタルジーがあると思います。それは、年寄りの世代のみならず、その次の私たちの世代にも見られます。なぜなら、当時は良くないことよりも良いことの方が多かったからです。」

もう一人の証言によると、人々は独立後のウズベキスタンにおけるさまざまな変化を認

めつつあるが、やはり長年慣れてきたソ連時代の制度を懐かしく思い、なかなか新しい制度になじめない人も少なくない。ある日バザールで会った人の証言は、そのような発想の転換の難しさを物語っている。

「ソ連時代の良い部分として、やはり将来に対する自信があったことが挙げられます。私たちは子供のころから学校に行つて、学校を卒業したら誰もが大学に入学し、誰もが就職して進路が決まっていくと信じていました。しかも、自分たちには輝かしい将来があるといつも思えたものでした。もちろん当時も自分がしたい仕事に必ず就くことができたわけではないのですが、今のようになくもない仕事を（生き残るために）せざるを得ない状態はほとんどありませんでした。」

4 「国頼み」の考え方

ウズベキスタンの経済改革における課題は、人々の「国頼み」の考え方を変えることである。独立直後、筆者はその必要性を実感する出来事に直面した。この時期に急増してい

たのは、国民の貯金を投資し、高い利息を約束する投資ファンドの存在だった。筆者の友人に、自分の父親の勧めで一定額をそのようなファンドの投資に回した人がいた。彼は、投資分の利息をもらえない状況がしばらく続いた。ある日、彼と筆者が様子を聞くためファンドに出向くと、ファンドのある建物の前にはたくさんの人が並んでいて、みな怒っていた。詳しく事情を聞くと、ファンドの関係者は姿を消しており、事務員のみが対応しているとのことだった。事務員は、何を尋ねても「自分たちは事務員であり、上司が戻らない限り何の説明もできない」と言っ。しばらくすると、投資した人のうち三丁四人が、「すべては政府の責任だ」と言いはじめた。周りの人もそのような意見に賛成し、政府機関に行つて自分たちの事情を説明することを提案した。しかし、さらに驚くべきことは、誰一人として、「自分の判断で投資したのだから、その失敗や騙されたことも自らの責任だ」と認めようとはしなかったことである。確かに、政府機関や金融庁が管理責任をきちんと果たしていたのかについて疑問は残るが、人々が自分の責任を放棄して、それを政府に押しつけようと考えたのは明らかだった。

このような事態が起こった背景は、人々が改革を支持していても、彼らに心理的な準備と改革に対する理解が足りないことだった。社会主義のもとでは、人々は共産党や政府の

指導に従い、政府と共産党は人々の生活を全面的に支援・保障していた。それが当時の「社会契約」であり、国民も国の指導部もそれを前提に行動していた。しかし、ソ連と社会主義のイデオロギーの崩壊に伴い、そのような関係は成り立たなくなつたのである。

独立当初のウズベキスタン政府は、ロシアやカザフスタンのような極端な改革を実施せず、ソ連時代に作られた制度を可能な限り利用するよう努めた。なぜならば、第1章で述べたとおり、ウズベキスタンの人口はその多くが非常に若く、二十五歳未満が半数以上だからである。そのことから、政府は、衝撃的な改革が与える影響を考え、教育、医療など人々に一番必要と思われる福祉を確保すると宣言した。そのうえで、これらの分野で段階的な改革を行い、次第に自由化することを目指した。カリモフ大統領に言わせれば、これがウズベキスタン独自の発展モデルだった。このような目的を達成するために、ウズベキスタン政府は経済分野においても主導権をもち、政治・経済分野の改革を先送りする形で物事を進めた。しかし、ソ連邦崩壊や他の要因の影響もあり、ウズベキスタンの国家収入が減るとともに、人々の要求はどんどん増えていったのだった。

現在でも、多くの人々は、自分たちの生活が国によって保障されるべきだと信じている。都市部では、国家には生活保障だけでなく新たな雇用先などを提供する義務があると考え

る人も少なくない。農村部の場合、多くの農園長はかつてのjolホーズの経営者である。彼らが原材料の調達や生産品の売買ルートの面で国に頼っていることは、彼らの「国頼み」の考え方が変わっていないことを示している。このような状況の中、農園長はソ連時代と同様、作物の栽培コストを抑えることよりも栽培総量の拡大を考えるのが一般的である。

「国頼み」の考え方が変わっていないもう一つの例として、興味深い世論調査のデータ（二一 五年）がある。増税の必要があることも視野に入れたうえで、政府支出を増やす方が良いか、減らした方が良いかを聞いた。ところが、八割以上（三三・四％）が「大きく増やす」、五％が「増やす」の人が健康・医療へ、九割（それぞれ五一・五％と三九・四％）の人が高齢者年金へ、そして五割（それぞれ一八・九％と三一・四％）の人が失業手当へ政府支出を増やすべきだと答えた。このことから、人々は今でも就職先の確保、収入、福祉、日常生活において政府に大きく期待しており、自分たちの力で問題を解決する能力と意志が十分に備わっていないことがわかる。

物事に対する考え方の変化が起こらない根本的要因は、共産主義の長年の歴史に加えて、国家と人々との関係が変わっていないことである。国营工場や農園の民営化のスピードは遅く、国による土地の独占、生産者・農園活動への過剰な介入がいまだに存在する。工場

や農園の規模は大きすぎて効果的な経営を行いにくい。さらに、農村部では土地の所有権が国や国営の農園にあるため、農民がコルホーズに雇われていたときと同じような状況下で働いているところも少なくない。政府から自立し、自分たちの力で自分たちの生活レベルを向上させようとする人がいても、彼らからしばしば聞こえるのは、「政府からの支援などは期待しない代わりに邪魔もしい」という声である。人々の価値観が変化し、彼らのイニシアティブが促進されるためには、中産階級の形成が必要である。そのための政策としては、民営化の促進と起業家への支援が求められる。

5 個人レベルでの国家からの自立

教育の場で国家から自立することを教えられても、人々がそれを行動に移すのは容易ではない。国家からの自立はソ連時代も重要な課題だったが、ソ連邦崩壊以降は人々にとって不可欠の課題になった。ソ連時代には国家の権力が人々の生活のあらゆる分野に浸透しており、政府は人々が国家に全面的に従うことを求めていた。しかし、ソ連邦が崩壊すると社会主義のイデオロギーも破綻し、政府には人々の要求に応える経済力と政治的動機が

なくなつた。そのことから、人々は自分の生活を国家に期待せずに支えなければならなくなつた。しかし、それは人々が単にその事実を認めるだけでなく、新たなスキルを身につけなければならぬという現実をも明らかにした。この問題は、特に公務員や物づくりにかかわっていない人たちにとって重大だつた。

筆者の友人の家族がそのようなことに直面したのは、ウズベキスタンが独立して間もない時期だつた。彼の両親は共に公務員だつたため、ソ連邦が崩壊すると給料が減らされ、生活に困つた。父親が家計を助けるためにタシケント近郊に土地を借り、ジャガイモの栽培と販売を始めようとした。父親は、土地を借り、ジャガイモの種を植えたものの、その栽培方法、害虫・大雨・雪対策についてあまり知らなかつた。大雨になると一家でその畑に行つて、ビニールで種を守るうとしたり、気温が極端に低下すると再びビニールを持つて区画全体を包もうとしたりした。収穫期までに一家全員が疲れ切つてしまつていた。ジャガイモを害虫や自然災害からは守つたものの、彼らは収穫の時期を間違つてしまつた。そのため、彼らが作つたジャガイモはサイズが大きすぎて、バザールでは買い手がなかつた。結局、赤字になつたばかりか、慣れない作業の影響で体調も崩した。翌年、友人の家族は農業で収入を得ることをあきらめたのだつた。このように、自分の生活

を自ら守るためには、その必要性を認識するだけではなく能力が不可欠だが、その両方を備えた人は多くなかった。

6 転換期の教育

国民の「国頼み」の考え方はソ連時代に形成されたが、それが問題視されはじめたのはペレストロイカの時期だった。特に目立ったのは教育現場で、多くの困難を乗り越えてきた教育者の中には、「国頼み」の姿勢や考え方を正そうとした人も少なくなかった。筆者の記憶に残っているのは、中学・高校時代のセルビア人の校長とタタール人で物理学の先生である。校長の両親は第二次世界大戦中にウズベキスタンに来て、彼もそのときはまだ子供だった。彼はウズベキスタンの生活になじみ、教育にその人生を捧げた人物だった。彼自身に子供がいなかったせい、自分のすべての時間と労力を学校と教育のために使っていた。彼は早朝から学校に来て、冬には学生が転ばないように除雪したり、夏には学校の庭に水を撒いたりしていた。彼は学生に対して非常に厳しく、恐れられる存在だった。彼は自分に厳しい分、学生にも同じことを要求し、大人として行動する必要性をいつも強調

していた。彼の要求に応えることができなかったとき叩かれるのは当然で、学生は彼のことを嫌っていた一方、彼の存在のありがたみもわかつていた。彼が学生に特に伝えようとしていたのは責任感と労働への敬意だった。彼がこれらを強調し、多くの人が自分の仕事に対して無責任な姿勢をとることを公然と批判できるようになったのもペレストロイカの時期だった。彼は、そのような無責任な姿勢はソ連という国全体を弱体化させてしまったため、「今こそまじめで一生涯懸命な若い世代が必要だ」と言っていた。

彼は授業への遅刻を絶対に許さなかったし、学校内でゴミを捨てることも厳しく叱っていた。ある日、友人と筆者はどこかで見つけた大きな釘で遊んでいたが、その釘を捨てたところを校長に見られた。彼は、まず、釘がどうやって出来るのか、どれだけの人が一生懸命働いてその釘を作ったかを私たちに説明し、叱ったうえにげんこつで二、三発殴った。子供相手の教育方法としては多少やりすぎの部分もあるが、そのときに言われたことは今でも頭の中にしっかり残っている、他人の労働を大切にすることを教えられたのである。

校長が担当していたのは社会の授業だった。ある日、彼は「給料とは何だ?」と聞いた。彼の存在が怖くて何も答えることができなくなっていた生徒たちの中から、一人が、「給料は労働の代わりにもらう報酬です」と答えた。校長はその答えに怒った。彼は、「自分が

毎日仕事場に行つて働けばそれでお金をもらえると思っているのか？」と聞き、「そうならお前たちの考え方は甘い。いいか、給料というのは、仕事場でお前たちが作り上げた『商品』が売れてもらえるお金の先払いだ。お前たちが作る『商品』に欠陥があれば、それは当然売れないし、お前たちは給料泥棒ということになる。ただ単に働いて、言われたことをすればよいと思うな。何かを作りさえすれば自分の責任を果たしたと思うな。ちゃんとした『商品』を提供することを目指して、その『商品』が売れて『消費者』がそれに満足できるまで、お前たちの責任は果たされないんだ！」と言つた。筆者は、そのときの言葉の重要性を今でも感じる。独立前の社会主義体制のときに言われたこの言葉は、独立したウズベキスタンの現状でさらに重要な意味をもつと言えるだろう。

似たようなことは物理の授業でも起こつた。先生の質問に二人の同級生が似たような答えをした。一人は簡潔に答え、もう一人は質問の枠を超えて、他の問題に関連する部分まで答えた。先生は簡潔に答えた学生に四を付け、質問の内容以上に答えた学生に最高得点の五を付けた。四を付けられた同級生は先生に不満をぶつけた。すると先生はある物語を話してくれた。

「シルクロードが通る中央アジアでは、多くの商人が行き来し、物を売っていた。ある商人に二人の手伝いがいて、彼は一人に非常に高い給料を払い、もう一人にそれほど給料を払っていなかった。しかし、二人の仕事の内容は同じだった。むしろ、給料の少ない手伝いの方が努力していた。ある日、給料が少ない手伝いはその不満を商人にぶつけ、なぜ仕事の中身が同じうえに自分はもう一人の手伝いより頑張っているのに給料が少ないのかを聞いた。すると、商人は、試験を行って確かめることを提案した。商人は給料が多い手伝いと少ない手伝いに同じ課題を与えた。

その内容は、隣の店に行き、その店が最近入手した絹の値段を調べてくることだった。まず、給料が少ない方の手伝いを行かせ、彼は値段を調べて商人に伝えた。商人が絹の質について聞くと、手伝いはもう一度隣の店に行き調べてきた。さらに、商人が、同じものが他の店でいくらかで売られているかと聞くと、手伝いは再度バザールに出向き相場を調べてきた。次に、商人は給料が多い方の手伝いを呼び出し、同じ課題を与え、隣の店に行かせた。すると、手伝いは絹の価格、バザールでの相場、絹の質などをすべて調べてきた。商人は給料が少ない手伝いにこう言った。『ただ単に言われたことをするのではなく、頭を使ってその次に何が必要なのかを考えるから、二人目の手伝いの給料は

多いのだ』と。」

先生は、「おまえたちも、ただ単に言われたことをする、聞かれたことしか答えないではなく、自発的にさまざまな問題を考えて行動をするべきだ。それが最終的な結果にもつながる」と言い、二人の学生の成績の差を説明したのである。

7 悪い子は良い子に

多くの人にとって衝撃だったのは、ソ連時代とうって変わって、長年勉強して学位を取得しても、それがまったく言っていないほど生活水準に反映しないことである。勉強して良い大学を卒業しても生活の安定の保証にはならず、むしろ何かを作る職人になった方が生活面では優利である。筆者がウズベキスタン航空の窓口で航空券購入のために並んでいたとき、ある人がそのような状況を次のような言葉で表していた。

「私は小学校から大学までずっと勉強に励んだよ。まったく勉強ができず、高校にも

入れず、十五歳で職業学校に移った友達も何人かいる。彼らは中学時代から悪さばかりしていて、勉強しようと思えなかった。彼らが職業学校行きになったとき、私は彼らがかわいそうだと思ったね。彼らのような人は、ソ連の人事制度のもとでは一生力仕事か地位の低い仕事をするしかなかったから。あれから十年経った。私は大学を卒業して公務員になり、その給料でギリギリの生活をしている。ある日、私の前に職業学校に入った友達が現れた。彼はおしゃれな服を着て高級そうな車に乗っていた。私はびっくり驚いて、なぜ彼がここまで裕福な生活を送れるのかを聞いてみた。彼によると、職業学校を卒業した後、自動車修理工場に勤めて、ソ連邦が崩壊したときにその修理工場を何人かで国から買い取ったらしい。さらに何力所か修理工場を作ったという。彼は現在の自分の生活にはとても満足していると言っていたよ」と。

彼がソ連時代に目指したものは、ソ連におけるライフスタイルと人々の出世コースの典型でもあった。多くの場合、人々は小学校に入学し、中学を経て高校や大学を卒業して共産党に入党し、昇進していった。それが人々にとって正しいことであり、そのような昇進を果たした人は社会のロールモデルになり、他の人が羨ましがる存在だった。

それは以下のような言葉にも表れており、多くの人々が人生で目指したことや人生の目的を表している。

「まず、私たちが学校に入学することは何かのお祝いの日のような気持ちでした。その後、私たちにはオクチャブリヤータ（小学生の共産主義組織）への入隊があり、同級生の誰もが何か良いことを達成して一番に入隊しようと思いました。その後はピオネール（中学生の共産主義組織）への入隊があり、それも緊張する瞬間でした。残念ながら、今の子供たちはそのような良い意味での記念すべき瞬間を奪われています。ピオネールの後はコムソモール（共産主義青年同盟）への入隊があり、私は同級生の中でより早く入隊できました。私の娘も優秀で誰よりも早く入隊できました。私は大学二年のときには共産党に入党しました。私の家族は全員共産党員で、当時の価値観として共産党員であることはもつとも教育水準が高く、育ちの良い家族の証明でした。私の娘は学校で金メダル（すべての科目で非常に優秀な生徒がもらうメダル）をもらって卒業しました。しかし、彼女は一九七七年生まれで一九九〇年代前半に学校を卒業し、そのとき社会に変化が見えはじめたため、共産党員にはなれませんでした。」

このような言葉からは、ソ連時代の社会構造と同時にソ連邦崩壊後の新たな現実が見えてくる。今では、大学を卒業してさまざまな学問について広く浅い知識をもつよりも、何かを作る、何かに実際に役立つ職業の方が人々に安定した生活をもたらすようになった。ソ連時代ならそのような職業はあまり人気がなく、公務員や「知的な」仕事に就くことが優先されていた。サービス業は差別されていなかったものの、複雑な知識を要しないと見なされ、若者が目指すものではなかった。多くの場合、そのような職業に就く人は学問に向いていないか、家庭の経済事情があるためにそのような職に就いていると見るのが一般的だった。

しかし、ソ連邦崩壊に伴って、状況は逆転し、人々が勉強してきた知識は新しい政治・経済の状況下ではまったく役に立たなくなってしまった。逆に、自動車修理などの技術は時代や政治制度が変わっても必要とされており、そのような職業に就いていた人の生活を保障するようになった。このような背景があり、以前公務員だった人の多くは、経済学、歴史学、哲学のような学位を捨てて、もう一度職業訓練を受けるようになった。その後、彼らは自動車修理、アパートのリフォームといった日常生活に必要な仕事に就く。それは社会制度と社会のルールの見直しを意味した。